

神に栄光を歸し、神を喜ぶ

クリスマス、おめでとうございます。25日の降誕日にみなさまと共にキリストを礼拝する機会を与えられて感謝です。

今年のクリスマスはペテロの手紙から御言葉に聴いておりますが、聖書の教えをどう生きるか、とくにキリストに結ばれ、救われた者の生き方がどのようなものになるか、教えを基本とするならば、わたしたちはそれぞれが置かれた状況のなかで、その御言葉にかたちを与えてゆかなければなりません。御言葉が血となり肉となる。そうでなければ御言葉によって生かされること、御言葉に養われる生活にならないでしょう。それが応用になるわけです。この橋渡しをするのが御言葉の説き明かしである説教ですが、今日はお祝いの日ですし、少し角度を変えて取り次ぎをさせて頂きたいと考えました。今朝のペテロの手紙の中には、わたしたちが神さまから与えられた賜物をよく管理して生きるように勧めがなされています。それはふたつの理由からと考えられます。ひとつは「万物の終わりが迫っている」こと。そこから終りを見据え、弁えて生き方を整えること。もうひとつは心をこめて互いに愛し合うこと。このふたつの消息から、わたしたちは自分に与えられている賜物をよく管理して生きることが願われているとペテロは言うのです。それは時間としての命であったり、それらを費やして得た能力や、財産など、賜物を神に捧げ、分かちあう生き方ですね。今朝はチャールズ・ディッケンズの「クリスマスキャロル」と、オー・ヘンリーの「賢者の贈り物」、このふたつの物語から説き明かしたいと思います。

この2冊は、この時期、本棚からひっぱり出して読み返す機会が多いのです。両方とも有名な作品ですので皆さまにはもう説明の必要はないと思いますが、「クリスマス・キャロル」はイギリスの文豪チャールズ・ディッケンズの、イギリス人の大好きな怪談噺です

ね。ただちょっと出来が良すぎた。ビクトリア女王時代のイギリスの作家で、日本でいうと夏目漱石みたいなポジションですね。強欲な金貸しスクルージが過去・現在・未来の精霊と出会って悔い改め、新しい生き方へと移され、クリスマスの精神を生きる男になる物語です。まさに「万物の終わりが迫ってい」ることを突きつけられた男が、自分のルーツを振り返り、自分が閉じ困っている会計事務所の外に広がる世界を眺め、みずからの生き方がこのまま改められることなく続くとするならばどのような終わりを迎えることになるかを見せつけられる。そして改心に至る物語です。彼は溜め込むのではなくて惜しみなく施す人間へと変えられる。不平を言わずにもてなしあうことを喜ぶ人格へと整えられる。19世紀のイギリスにザアカイが生きていたらこうであったかと思われるような生まれ変わる喜びがあります。クリスマスの恵みはまさにこの生まれ変わる喜びです。御子の誕生とともに新しく生きる喜び、ディッケンズは彼なりに聖書の教えをこのように語り直しています。

「万物の終わりが迫っています。だから、思慮深く振る舞い、身を慎んで、よく祈りなさい。何よりもまず、心をこめて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。」

この御言葉をクリスマスの出来事から読み解くのに更に良いのが「賢者の贈り物」です。オリジナルのタイトルは「The Gift of the Magi」で、キリスト教文化圏では東方からやってきた占星術の学者たち、彼らが賢者と呼ばれています。幼子イエスを拝んだ最初の異邦人ですね、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げました。この出来事をオー・ヘンリーは下敷きにしています。この人は短編が持ち味ですから芥川龍之介のポジションですね。あらすじは貧しく若い夫婦が迎えたあるクリスマスの出来事です。日頃つましく暮らしている彼らですが、せめてクリスマスには相手に喜んでもらえるプレゼントを贈りたい。ふたりにはそれぞれ自慢

できるものがある、夫は家に代々つたわる懐中時計、妻は美しくタツプリとした髪の毛、しかし、ふたりはお金が工面できなくて、結局、夫は懐中時計を質に入れて妻の髪にかざる美しい櫛を、妻は自分の髪の毛を売って夫の懐中時計につける銀の鎖を買う。いざプレゼントを渡そうと思ったらお互いに、自分のいちばん大切な宝を相手のために手放していたというこのストーリーはみごとなものです。この若い夫婦のふるまいはキリストを贈られた神の思いを写し取っている。クリスマスの本質にふれている。そしてクリスマスという神さまの出来事に真実に与った者の強さが表されていると思います。その強さとは自分のいちばん大切なものを手放して、相手に喜びを与えようとしたことです。しかし、残念ながらこの贈り物は宙ぶらりんになります。懐中時計を飾る鎖も、髪を飾る櫛も筆筒の中にしまわれることになった。そういう意味ではプレゼントは空振り、二人のしたことを「愚か」という人もいるかもしれない。しかし、そこに愛が残った。心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです、とペテロが語ったような愛がそこに表されている。それは「十字架の言葉は滅んでゆく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の知恵です」とパウロが語ったことにも通じます。ヘンリーは適切にも、この短い物語に「賢者の贈り物」というタイトルをつけ、そして彼らに「賢者」の名を贈った。そこにはキリストの福音に則った主張があります。相手のために自分を後回しにすることの出来る人、自分は貧しくなっても、相手を活かそうとする人、それは愛のためになされた愚かな行為であり、分かち合いであり、それが示されたことがモノを贈り合うよりもはるかに尊いのだという主張。この尊い愚かさに世界が真実に生かされる愛がある。モノがないとき、わたしたちは自分を割いて相手に与える。そこに愛が表されてゆく。利己的なものではなく、利他的な愛です。無償の愛といってもよい。そうした分かち合いの生き方の根底に、根っ

ここに、飼い葉桶のキリストがおられる。十字架にかかられたキリストがおられる。もっとも高貴で、偉大なお方が、こんなにも小さく、低くなられた。それほどまでに、神がこの世を愛し、わたしたちを愛して下さったということがクリスマスの喜びです。神さまは独り子をわたしたちに贈られ、貧しくなられた。しかし、この愛によって生じた貧しさ、尊さがクリスマスの中心にある出来事です。ここから、あなたの生き方が変わることを神さまは願われているのです。

ディッケンズも、オー・ヘンリーも、与えられた作家としての賜物をよく生かして、神がクリスマスに起こして下さった出来事の本質を彼らなりに語り直しました。脚色してその世代に生きる人々に伝えた。彼らは、キリスト・イエスが来られたからこそ、この方の飼い葉桶から十字架向かうご生涯を通して初めて現れてくる新しい命の可能性に揺り動かされた。生ける希望としてのキリストにふれたのです。あなたはどうでしょうか。わたしたちは神さまからそれぞれ異なった賜物を与えられて生きるものです。ペテロは奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それはすべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです、と語りました。そのような生き方をわたしたちもなりたいものです。キリストの福音を自分の人生において語り直してゆく歩みです。今日が年内最後の礼拝となります。礼拝が、わたしたちをつねに主に立ち返らせます。ここに共に生きる兄弟姉妹がいます。新しい年の礼拝は1月1日からです。来たる年も主にある兄弟姉妹の皆さまと共に、わたしたちの神を褒め称え、御言葉に支えられながら神に栄光を帰し、神を喜ぶ歩みを続けたく願っております。

お祈りいたします。